

障害者の就労における支援実践において 動物を介在させることの意義

首藤 南々帆

障害者本人にとっての働きがいや働く喜びを実感できることが就労にとって重要なことである。しかしながら、障害者は、身体的なあるいは知的・精神的な障害があるが故の「生活の困難さ」や「生きづらさ」を抱えていることで、実感する条件や経験が狭められている。その一例として、動物を飼うことに対して金銭面や病気の症状の側面から反対されるということがある。このような人々は動物が好きだけれども、動物と触れあう機会を持たせてもらえないのではないかと。横山(1996)によれば、動物がいること、動物と触れ合うことによって血圧が下がるなどのリラックス状態になることや、安心感が得られ、それが社会的な潤滑油になり得るとされている。具体的な効果としては、生理的効果・心理的効果・社会的効果の3つであると言われている。

上記の効果から、筆者は次のような仮説を立てた。障害者の就労を促進させていくためには、就労に向けた準備をしていく障害福祉サービスである就労継続支援 B 型事業と動物を組み合わせ、動物を介在させる活動や仕事を展開することで、アニマルセラピーのような効果がそこに発生し、「社会性の改善」「ストレスの軽減」「コミュニケーションの促進」など継続した労働につながる効果が得られるのではないかと。また、社会性の改善やコミュニケーションの促進がなされることで、自分自身に自信が付き、そこから「生きがい」や「働きがい」にもつながってくるのではないかと。これがディーセント・ワークにつながるきっかけとなる。

そこで、障害者の就労支援に動物を介在させることはどのような意義があるのかについてインタビュー調査を用いて明らかにしようとしてきた。

調査対象者は、障害者施設 X に通所している知的障害と精神障害を持っている 20 歳以上の男性 3 名、女性 2 名の計 5 名である。いずれも 20 歳以上で言葉でのコミュニケーションが取れる方を対象とする。また職員にもインタビューを行ったため、調査対象者は、障害者施設 X で働いている職員 3 名である。対象施設に調査の協力依頼をした。インタビューの時間を確保できる職員を対象とし、施設の責任者に対象者の選定を依頼した。

利用者に対してのインタビューでは、動物と関わる仕事をして感じたことや思ったことがあるか、人間関係やコミュニケーションに変化はあったのか、家での生活や気持ちに変化はあったのか等の質問を行った。

職員に対してのインタビューでは、動物を介在させた就労支援を行うことで利用者の行動や言動などに変化は見られたのか、利用者の人間関係やコミュニケーションに変化はあったのか、利用者の症状に変化はあったのか等の質問を行った。

利用者からのインタビューで得た語りから分析を行った結果、仕事に対してのやりがいを感じている人が多く、意識も高くなっていることが明らかとなった。また、人間関係やコミュニケーションの点においても、「動物」という会話の糸口があることで会話が苦ではなくなったと話す人も見られた。就労という点に関しても、週に 1 日外に出ることが限界だと感じていた人が、動物に会いたいという気持ちから通所率が少しずつ上がっているという現状を確認した。

職員からのインタビューで得た語りから分析を行った結果、動物を介在させる方が仕事において、積極性や意欲の向上が見られることが明らかとなった。人間関係やコミュニケーションに関しては、「笑顔が増えた」という語りがあり、人との関係性を築くための練習が自然とできている様子がうかがえた。利用者の症状の変化については、処方される薬の数や症状自体に変化は見られないものの、通所率が上がったとの自身の語りがあった。症状そのものの改善は見られないが行動が変化している点から、目に見えて分かるほどの大きな変化はなくとも、少しずつではあるが症状も良い方向へ変化していると言える。

今回の研究では、動物を介在させた就労支援をテーマに扱ったが、動物と触れ合うことでその日 1 日が頑張れることや、仕事への取り掛かりが早くなったなどの結果を得ることができた。また、自身に障害があることを分かっているからこそ動物を飼う責任を持たないという判断で飼うことを諦めていた人が、施設に来て飼えない分世話を頑張りたいという語りも聞くことができた。作業の効率化を考えた際に、作業スピード自体が早くなったりしたわけではないものの、仕事に対する積極性が見られたり、責任を持って仕事に取り組む姿勢が見られたりした。さらに、外に出ることができなかった人が、週に 1 度出られるようになり、今ではその回数を上げようという話も出ている。利用者自身の語りからも、職員からの語りからも、動物を介在させた就労支援を行うことで社会性の向上がなされていることが明らかとなった。このことから、動物を障害者の就労支援に介在させる意義は社会性の向上、生きがいや働きがいの発見など、主体的に生きていくための原動力をつくるという点で、大きな意義のある労働である。